

長 蓮 寺 報

NO.15 (平成22. 12. 23)

はやぶさに学ぶ

「はやぶさ、無事帰還！」

本年6月、一通のEメールを受け取りました。それは、オーストラリアに観測に行った友人からのものでした。彼は、たいへん興奮した口調で現地の様子を伝えてくれました。

平成15年5月、探査機「はやぶさ」は、「イトカワ」(直径 わずか300m) という小惑星に向けて打ち上げられました。その後、7年と言う歳月と延べ六十億キロの旅を終え、地球に無事帰還しました。その間紆余曲折あり、故障や行方不明など数々のアクシデントを乗り越えての帰還でした。そして、本年6月13日4台あるエンジンのうち3台が停止しながらも、百孔千傷の「はやぶさ」は最後の使命を果たすべく、大気圏に突入!、「イトカワ」から採取した微粒子が入ったカプセルを地上に投げ落とし、自らは大流星になり燃え尽きたのです。

このニュースは、世界を駆け巡り、当然日本でもトップニュースで伝えられました。この光景をテレビでご覧になり、切なさや感動を覚えた方も大勢おられらのではないのでしょうか?実際にこの光景を目の当たりにした友人は「涙が止まらなかった!」と言っておりました。

確かに「はやぶさ」は人間が操作している「機械」です。でも、何故?この「機械」の「はやぶさ」に多くの方々が共感を覚えられたのでしょうか?

"壮大な宇宙へのロマン"もあるでしょう。ただ、それだけではないような気がします。私が思うに「今私達に不足している何かをはやぶさは持っていたから!」に違いないと思うのです。

今、私達が暮らす娑婆は、「だいたい、この程度でよかろう。と中途半端であきらめたり」また、「僕がこんなにしてやったのに、あの人は何もしてくれない」と、人に対して報いを求め、それがないと、その人に腹さえ立ててしまう傾向にあります。一方、「はやぶさ」は、いかなる困難に遭遇しようとも決してあきらめず、自己の身を挺して、報いを求める事もなくカプセルを生かしました。当に、仏教の大事な教えの「菩薩行」を実践したと言えましょう!

日蓮大聖人も、お言葉の中で「私は、唯々皆の幸せを願うのみ!その為に、いかなる迫害に遭おうが、南無妙法蓮華経を広めようと努力した」と半生を振り返っておられます。門下である私達は、大聖人、しいては「はやぶさ」の姿勢をしっかりと心に刻み込み、日々精進して参りましょう!

皆様にとって来る平成23年が幸多き年になりますように。

合 掌

平成23年 年忌表					
1 周忌	平成22年	1 7 回忌	平成 7年	3 7 回忌	昭和50年
3 回忌	平成21年	2 3 回忌	平成元年	4 3 回忌	昭和44年
7 回忌	平成17年	2 7 回忌	昭和60年	4 7 回忌	昭和40年
1 3 回忌	平成11年	2 3 回忌	昭和54年	5 0 回忌	昭和37年

長蓮寺の基礎知識Q & A

Q:「お経」について教えてください ①

最近、ご法事の席で、経本をたくさん用意して参詣の方々みんなと一緒に読経するようにしております。たいへん好評なんです。先日、ご法事の席でとある檀家さんから質問を頂きました。

「丁寧に読経を読んでいただき大変ありがとうございました。ご先祖様も喜んでおられることでしょうか。ご唱和して私自身もとても清々になりましたが、お経を唱えていると何か功德（良いこと）があるの？」と質問を受けたことがありました。

そこで、今回はそもそも「お経とは何ぞや！」と言う根本的な問題を取り上げてみたいと思います。

○お経の語源

「お経」は、古代インド語の「スートラ」と言う言葉から来ています。「スートラ」と言う言葉は、縦糸（たていと）の意味です。縦糸は織物の基本であり、他の色と交わらないところから、お釈迦様の教えを「一定して変わらない」「普遍の道理を説いた書物」と言う意味で使われるようになりました。

その後 中国に渡り、漢字の「経」という字に訳されました。

○お経の歴史



「お経」とは、「お釈迦様の教えを書き記したもの」と考えておられる方が多いと思いますが、そうではありません。実は、どんなに古いお経でも、お釈迦様が亡くなってから100年以上たってから書き記されたものなのです。

昔々、お釈迦様のおられた時代、インドでは文字自体はあったのですが、まだ普及していませんでした。その為、35才でお悟りを開かれ80才で入滅されるまでの45年間の布教説法の中で一文字も残されておられません。

お釈迦様が亡くなられ、しばらくの間はお弟子達は当然のことながら、ただ嘆き悲しんでおられました

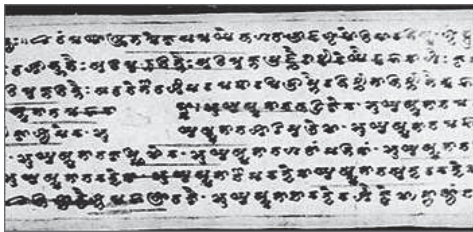
しばらくしてこの偉大なお釈迦様の教えをなんとか後生に伝え残さなければならぬとの声が高まり、多くのお弟子（多いときには、500~1500名）が集まり、お釈迦様が生前説法されたことを一つ一つ検証し（今で言う編纂会議~結集）を重ね、「お経」が生まれました。



故に、お経の出だしの文句で「如是我聞」（私はこのように聞きました）となっている「お経」が多いのはこのためです。

ただ、はじめに出来上がった「お経」は、とにかく、自己の解脱のみを主眼として、どんどん一般の人々には手のとどかないものになってしまいました。

その後、「これではイカン！お釈迦様のお考えから離れてきている！もっと大勢の人々を救える様な仏教に戻すべきだ。自分よりも他の人々を救おう！」との考えが起こり、私達の法華経をはじめ、多くの大乘仏教の教え（お経）が成立しました



サンスクリット語の法華経
(古代インド語)

オリジナルの「お経」は古代インド語で記されていましたが、その後 中国の僧（有名な三蔵法師や鳩摩羅什等）によって漢字に翻訳され、それが朝鮮半島を経由して、聖徳太子の時代に、たくさんの「お経」が日本に伝来し、今日に至っております。

日本で読まれるお経が漢字で書かれたものが多いのは、中国で翻訳されたものがそのまま伝えられたからなのです。

これらのお経を全部集めたもの(お経全集)を「大蔵経」「一切経」と言います。

今日、日本でポピュラーな大蔵経としては「大正新脩大蔵経」や「国訳一切経」等があげられますが、どの大蔵経・一切経にしても一冊が百科事典の様な厚さで、全部で100巻（冊）以上にもなります。

この中には、法華経はもちろんのこと、3000部の「お経」が収められています。

このようなたくさんの「お経」があると、どれに頼って良いのか解らなくなるのが実際でしょう。

この為、どの「お経」を重要視するか！などに依って、様々な宗派が生まれたのも一つの事実です。

私達の日蓮大聖人も比叡山で遊学中、この膨大なお経をすべてお読みになり理解され、そして、ついには、「法華経」（妙法蓮華経）が「お釈迦様のお心に添った1番のお経である」と認識され、法華宗を開かれたのです。



大正新脩大蔵経





◎節分会（豆まき） 平成23年1月30日（日）午前11時～

明年も節分会（豆まき）をお日待ちに併せて開催致します。

来年で節分を勤修させていただくようになって、来年で7回目になります。徐々にご参詣の方も増えてこられ、喜んでおります。



みなさま、家族お誘い合わせの上
お越し下さい。

たくさんのご参詣を心より、
お待ちしております。

尚、お札・御祈願を希望される方は、
同封致しました別紙の申込用紙にご記入の
上お申し込み下さい。

◎檀信徒親睦会について

先月、檀信徒の方々の親睦を兼ねて、古川實氏を講師にお願いし「海釣り体験」を開催しました参加された方々、皆さん初めての釣りに最初はドギマギしてましたが次第になれて、たくさん釣られたようです。

このような檀信徒の交流の場を色々企画しようと思っております。

来春は山菜採りを予定してます 皆様 ふるってご参加ください。



◎七日会（お経の練習会）のお知らせ

毎月7日午後2時よりお経の練習会をひらいております。
参加費無料になっておりますので気軽にお越し下さい。